

[講演要旨]埋もれていた被災者実態調査 ～宮村攝三が行った「1948 福井地震通信調査」

木村玲欧 (富士常葉大学准教授)・宮村攝三 (故人・元・東京大学教授)

Collecting Victims' Descriptions from the Undisclosed Questionnaire Survey

—the 1948 Fukui Earthquake Mail Survey conducted by Dr. MIYAMURA, 62 years ago

KIMURA, Reo (Fuji Tokoha University) and MIYAMURA, Setumi (University of Tokyo)

§ 1. はじめに

2005 年、宮村攝三氏に面会した際、「1948 年福井地震で通信調査(被災者への質問紙調査)を行ったのだが、戦後の混乱期の中で調査をただけになっていて分析も発表もしていない。一式を譲るので時間があるときに分析をしてくれないか」と頼まれた。そして後日送られてきた段ボール箱の中に、1948 年福井地震における「福井県坂井郡金津町の震災調査資料」の回収済み質問紙について、腐食が進んでいる原票の束が入っていた。分析を進めようとは思っていたが、判読が難しい原票からデータを起こすなどの時間を確保することができないまま、宮村氏は 2007 年に逝去し、段ボールも開封されたのみの状態で置かれることになった。

しかし 2009 年、内閣府「災害教訓の継承に関する専門調査会 福井地震分科会」が立ち上がり、木村が委員になったことから「被災者の記録から読みとく被災実態」としてデータ化・分析を行うことになった。

§ 2. 通信調査の実施

通信調査は、福井県坂井郡金津町を対象地域にして、震災から4ヶ月半が経過した11月に行われ、211世帯から回収された。金津町は全壊845戸、半壊81戸、焼失304戸であり、焼失戸数でいうと福井市(2,609戸)、丸岡町(1,176戸)に次ぐ被災地であった(『福井震災誌』福井県, 1949)。対象者選定は、ランダムサンプリングによるものであり、調査票の訪問配布・郵送回収で行われた。この意味で、社会調査としては当時の状況を勘案しても、一般性・普遍性の高い有意義な調査であると評価できる。また、資料の中には、調査票の訪問配布時に不在だった世帯に添付する「お願い文」(文案?)が見つかった。このように手間暇をかけて誠意をもった調査が行われており、総合的に地震現象を解明しようとする意志と熱意を感じることができる。

§ 3. 調査結果からわかったこと

家屋被害について見ると、全潰(完全につぶれた)という、いわゆる層破壊が65.8%にもものぼった。ついで全焼が16.3%、半焼12.8%と続いた。なお、全焼(n=32)のうち、31件について「家屋被害は全潰(完全につぶれた)被害である」と回答していたために、実に81.6%の世帯の家が層破壊するような強いゆれに見舞われていたことがわかった。

家屋被害と家屋竣工年数との関係を見ると、家屋竣工年数が10年以下の家では、全潰(完全に潰れた)家屋が64.9%、それ以外が35.1%であり、それ以上の年月が経過している家屋では80~90%近い家屋が層破壊していることを考えると、家屋の新しさが大きな理由であることが考えられる。

地震時の行動について尋ねる項目をみると、地震時に屋外にいた人が35.8%、屋内にいて戸外に逃げた人が39.5%、屋内にいて戸外へ逃げられなかった人が19.1%、逃げなかった人が5.7%であった。当時は関東大震災の影響で「地震時には狼狽することなく戸外へ避難する」という指針が伝えられていた(文部省震災予防調査会「地震津浪の避難に関する注意」(『大正大震災大火災』大日本雄辯會講談社(編纂), 講談社, 1923))。そのため、約4割の人が地震で揺れる中を急いで戸外へ逃げたことが考えられる。

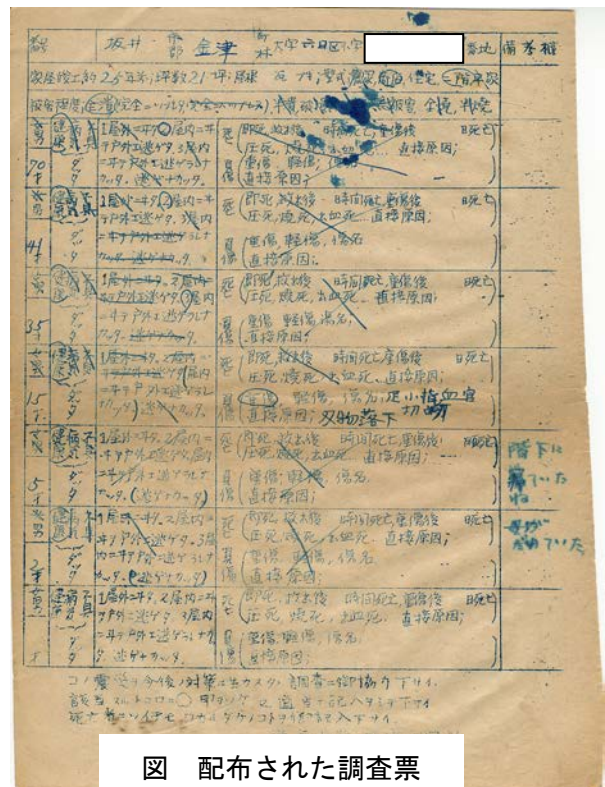


図 配布された調査票